

●昭和12年7月7日夜、北京郊外盧溝橋の発砲事件

盧溝橋(ろこうきょう)

北京の西側を流れる永定河に架かる全長350
mの大理石の橋。金の時代(1192年)に作られ、
欄干140個の狛獅子が、一つ一つ表情も姿勢も
違って、マルコ・ポーロが「東方見聞録」に
「世界で一番美しい橋と思う」と紹介したこと
から、別名「マルコ・ポーロ・ブリッジ」。

明の時代(17世紀)、橋の東側に宛兵皇城(えい
べいけいじょう=東西700m南北300m)が築かれ、住民2千人の
ほか中国第29軍が駐屯していた。橋の袂には、
清朝第6代皇帝乾隆帝(1711~99)直筆の「盧溝
曉月」の石碑が建ち、世界遺産に指定。

▽日本陸軍1個中隊(135人)が 夜間演習中

突然 銃撃された 全部で18発だったと言われる

▽誰が発砲したのか

計画的な 謀略的なものだったのか

偶発的なものだったのか 真相は 依然謎のまま

▽死者が出たわけではなし 出先の些細なトラブル

●内閣は「若きプリンス」、45歳の公爵近衛文麿内閣

▽日本政府は「不拡大、現地解決」の方針

現地では 間もなく 停戦協定が結ばれた

▽それが どうして 支那事変に 拡大したのか

▽陸軍には 発砲事件を口実に 華北(中国)を

「第二の満州国」にしようとする 拡大派

▽中国側にも 共産勢力が

一挙に「抗日民族統一戦線」結成へと 策動

▽盧溝橋事件が 不幸だったのは

ちょっとした行き違いが 次々と 重なり

お互いの不信感を 増幅して

8年間にわたる 日中全面戦争の引き金に

●中隊長・清水節郎大尉は、「何かいやな予感」

▽支那駐屯軍 歩兵第1連隊第3大隊第8中隊が

夜間演習のため 豊台(北京城西4km)を出発

盧溝橋に着いたのは 7日午後4時半頃だった

北平(ペキン)

北京は河北省北部に位置し、遼、金、
元、明、清の古都。南京に国民政府を
樹立した蒋介石が、昭和3年6月、北京
に入城して、北伐(北方軍閥の軍転動)を完
了させた時、「一つの国に二つの都が
あるのはよくない」と、北方平定にちな
み北平と改称。24年、中華人民共和
国の首都となり、北京に戻された。

蔣介石(しょうかいせき)

1887~1975 明治40年日本に留学、陸軍
が中国人のために作った振武学校に学
ぶ。大正15年国民革命軍総司令となり、
中国統一軍事行動を開始。昭和3年国民
政府(南京)主席。国共合作を受け入れ、支
那事変で対日戦を指導した。戦後、国共
内戦を起し、敗れて台湾に渡る

マルコ・ポーロ(Marco Polo)

1254~1324 イタリア・ヴェネチアの商
人。1270年末、元へ行く宝石商の父に伴
われ、74年フビライに謁して任官。中国
各地を見聞、95年帰国。ジェノヴァとの
戦いに敗れて捕えられ、その獄中で「東
方見聞録」を口述。ヨーロッパ人の東洋
観に大きな影響を与えた

近衛 文麿(このえふみまろ)

明治24(1891)~昭和20(1945)東京生ま
れ。五摂家筆頭・関白家の出。昭和6年貴
族院副議長。8年議長に進み、12年第1次
内閣を組織。支那事変で13年「国民政府
相手にせず」と声明し解決の道を塞ぐ。
枢密院議長を経て15年第2次内閣組織、
大政翼賛会を結成し日独伊三国同盟を
締結、枢軸外交、南進政策を推進。第3次
内閣で日米交渉に努力したが総辞職。
戦後、戦犯の出頭命令を受け服毒自殺

▽20日ほど前 演習した時は 何もなかったのに
堤防の鉄道橋から 龍王廟にかけて
散兵壕が構築され 200人ほどの中国兵が工事中
▽夜7時半頃から 陣地構築演習に
▽10時半頃 仮設敵(敵艦想定した部隊)に
休憩をとらせるため 伝令を出したところ
「演習部隊接近」と 勘違いした仮設敵が
軽機関銃を 3発点射の 空砲射撃をした
▽突然 龍王廟付近から 数発の実弾
▽清水は 演習を中止し 集合ラッパ

今度は 鉄道橋の方向から 10数発の実弾射撃
— 事態をこじらせた「兵隊行方不明」 —

伝令に出した二等兵が道に迷い、20分ほど帰隊が遅れたのだが、豊台の大隊長・一木清直少佐(いちき・きよなお)も、北京城内の連隊長・牟田口廉也大佐も「万一、中国軍に拉致されたのだとしたら一大事だ」牟田口は一木に大隊主力を率いて現地急行を命じ、連隊付森田徹中佐を第29軍に派遣し、宛兵県城の立ち入り検査、謝罪を要求させることにした。

清水は中国軍との緊張状態に気をとられ、一木と合流してからも午前2時過ぎまで「兵隊無事」の報告を忘れてしまった。森田の立ち入り検査の要求は続き、第29軍は反発を強めた。森田が交渉に出発したのは午前4時。その前に無事が分かっていたら、立ち入り要求はなかったし、交渉がもつれることもなかったろう。

▽牟田口は 一木から「午前3時25分、龍王廟方向で3発の銃声を聞いた。純然たる敵対行為と認む」
電話報告を受け 4時20分「戦闘開始」を命令
▽一木大隊は 龍王廟を占領したが
11日夜の停戦協定成立まで 戦死11 負傷36人
中国側も 約100人の死傷者
▽牟田口は「事件を最小限に食い止めるには
この際、一喝を食らわすことが賢明と思った」

●32歳、海軍少佐の高松宮が、実に的確に盧溝橋事件の問題点を指摘している

▽第一に望んだのが 日本側の冷静な対応

牟田口 廉也(むたぐち・れんや)

明治21(1888)～昭和41(1966)佐賀県生まれ。陸軍中将。参謀本部支那課長を経て昭和11年支那駐屯軍歩兵第1連隊長。16年第18師団長となり、マレー・シンガポール攻略。18年第15軍司令官。19年インパール作戦敗退の責任を問われて予備役。20年召集され、予科士官学校長

…… 現地責任者は豪将タイプ ……

牟田口は昭和19年3月、「悲劇のインパール作戦」を強行した軍司令官。補給を全く考えない無茶な作戦でインパール(インド)に進攻、戦死3万、戦傷・戦病者5万人の大きな犠牲を出した。

一木大佐の一木支隊(900人)は、ミッドウェー島攻略に当たる予定だったが、海戦の大敗で取り止めとなり、待機しているところへ昭和17年8月、米軍がガダルカナルに上陸。急速、ガ島に向かった支隊は米軍飛行場に夜襲の銃剣突撃を敢行、800人が戦死し一木もピストル自決した。

高松宮 宣仁親王(たかまつのみや・のぶひとしんのう)

明治38(1905)～昭和62(1987)大正天皇の第3皇子。海軍大佐。戦争中、軍令部勤務、砲術学校教頭。戦後は国際文化振興会・日仏協会・日伊協会総裁。大正10年、海兵在学中からの「高松宮日記」(20冊)

— 「高松宮日記」から —

(7月12日)日本の新聞が、陸軍の「国民が、北支出兵についてこまい」と云ふ気持ちから出る宣伝のためか、事局不拡大の方針と云ふソバから、何んもなく、或るは参謀本部で徹夜してるとか、ヤレ何んのと上づゝた宣伝をしてゐるのは、その逆宣伝効果となるべし。この際日本は極めて冷静に準備すべきなり。

▽読売新聞 8日朝の号外

「支那軍不法射撃 日本軍も応戦す」

朝日新聞夕刊も「北平郊外で日支両軍衝突
不法射撃に我軍反撃 廿九軍を武装解除」

▽どの新聞も 第一報の段階から

陸軍当局の発表のままに「中国軍の発砲」

「暴支膺懲」と 国民世論を 煽り立てることに

▽盧溝橋は 京都の鴨川で 演習するようなもの

それも 中国軍の目と鼻の先で 我がもの顔に

▽「現地で解決しようとするれば、中央で大げさに」

外交官の消極的姿勢

軍部に すっかり おぶさっている近衛首相

●問題は、どちらが先に発砲したかではなく、日本がどのように処理しようとしたかだった

▽近衛内閣成立は6月4日 盧溝橋事件の33日前

▽広大な面積 膨大な人口を持つ中国が

民族戦争の形で 長期抗戦を展開したら

どんなに 恐るべき結果を もたらすのか

▽近衛内閣は 深い考慮と 検討を加える暇もなく

中国大陸奥深く 無謀な突入を 始めてしまった

●盧溝橋事件は、なぜ起こったのか？

▽突き詰めて行けば「そこに日本軍がいたから」

▽政府は 昭和11年4月17日

支那駐屯軍 5,774名に増強を 閣議決定

▽各国は 中国国内の 不安定な政情から

中国側に通告するだけで 適宜 兵力増減の措置

▽行き過ぎた「華北分離工作」 軌道修正の狙い

……「華北工作」……

関東軍、支那駐屯軍は華北を国民政府から引き離し、日本の支配下に置こうと、活発な分離工作を進めていた。昭和10年5月天津の日本租界で、親日派の新聞社社長2人が暗殺されると「抗日テロは国民政府が煽動しているからだ」と河北省から政府機関、政府軍を追い出した。11月には、通州に親日派・殷汝耕を担いで冀東防共自治委員会(冀は河北省の臚)を作り、殷は「反蒋介石宣言」をして、関税を7分の1~4分の1に下げたから、華北の輸入は冀東経由に替わり、国

(14日) 北支事件モ、発砲ハ支那ガ先カシラネド、発砲セシムル如キ演習ヲナスコトニモ十二分ノ欠点アリ。或ハ支那兵營ニ突撃ノ教練？ヲナシタリ、或ハ内地ト同様ニ而モ現地ニテ演習スルハ不謹慎ナリ。之ヲ以テ条約的正当ナリトハ、云ヒ得ザルモノトス。現地ニテ停戦解決セントスレバ、中央ニテ大ゲサニスル、又何ントナク一系乱レザル戦略ト云ヒ得ザルベク、各軍司令官ガソレゾレ声明シ、又ソノ言々一致ヲカク。宜シク外交官ヲシテ、外交ヲナサシムモ、戦略ニアラザルカト反問シタキバカリナリ。チナミニ、今度モ外交官ガ自棄的ニ消極的ナリ。

(16日) 近衛がすつかり軍部にオブサつてしまつてゐる感じなり。

支那駐屯軍

明治33年6月、義和団(白蓮教系の拳法を武器とした秘密結社)が列強の中国侵略に民衆を動員、北京の各国公使館を包囲した時、日本や欧米各国は連合軍を編成し北京を解放。翌年の「北京議定書」で、居留民保護とこうした暴動に対処できるように、軍隊駐留権を認めさせた。

日本に割り当てられた兵力は1,570名。北清駐屯軍を編成、天津に軍司令部を置き、北京公使館地区、天津租界と北京-海岸の鉄道沿線要地に警備兵を配置した。45年に中華民国が誕生後、支那駐屯軍と改称。主力は満州国境の山海関を中心に天津から東に配置していた。

殷 汝耕(いん・じょう)

1887~1947 中国の親日政治家。早大卒業後、国民政府に入り妻は日本人。上海事変のとき上海特別市長として休戦に尽力。戦後、漢奸として処刑された

民政府の財政には大きな痛手となった。

北京には政府軍に代わり、察哈爾(チヤハル)省を地盤とする反蒋介石系の宋哲元率いる第29軍が入っていた。関東軍が宋を華北工作の中心に押し立てようとしたので、国民政府は12月、宋を冀察政務委員会委員長に任命、北京・天津地区の権限を与えた。宋は、日本軍にも国民政府にも不即不離、曖昧な態度をとっていたが、北京で12月9日、学生1万人が「抗日救国・国共内戦停止」を要求してデモ。これをきっかけに激しい排日・抗日の波が中国全土に広がり、29軍兵士にも日本軍に対する反感が強まった。

▽石原莞爾大佐(鐵嶺作戦課長)は「華北工作」に危機感
▽昭和11年1月13日「北支処理要綱」を作成

「北支処理要綱」

内容は依然として華北分治策。冀察政務委員会を国民政府から引き離すよう指導し、華北5省に自治政府を作らせる。ただ、漸進的に行なうとした。そのため、関東軍を華北工作の主担任から外して、対ソ戦備に専念させ、華北処理は支那駐屯軍に当たらせることになった。

▽関東軍は「支那駐屯軍支援」を口実に介入
その口出しを封ずるための兵力増強だった
駐屯軍司令官を親補職に格上げ
部隊(1較)を長期駐在にし組織を強化した
▽しかし「関東軍抑制」は日本のお家の事情
中国側には「侵略態勢の強化」と映った
▽しかも増兵部隊を駐屯させた豊台は
北京城のすぐ傍 鉄道(北-京)の要衝だった
▽通州は議定書の駐屯地規定(海岸との鉄道交通確保)に
違反する恐れ 豊台に変更したことも裏目に

●共産軍討伐に全力を挙げていた蒋介石を、抗日に踏み切らせるきっかけが「綏遠事件」

▽田中隆吉中佐(騎兵)は内蒙古を独立させ
日本の支配下に置こうと 昭和11年11月4日
内蒙古の王族・徳王に綏遠省に攻め込ませた
▽蒋介石は中央軍(20勦)を北上させ 陣頭指揮

宋 哲元(そう・ていげん)

1885～1940 山東省出身の軍人。昭和10年12月、第29軍を率いて北京に入る。国民政府から冀察政務委員会委員長に任命され、盧溝橋事件の折衝に当たった

石原 莞爾(いはら・かんじ)

明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中將。昭和3年関東軍参謀。満州事変を起こし、満州国建国を推進。10年参謀本部作戦課長。12年3月作戦部長となり、支那事変不拡大を主張したが、容れられずに関東軍参謀副長に転出。東条と対立し16年京都師団長で予備役

石原の考え

満州国という既成事実の強化に努め、軍備充実と日本の重工業化を急ぐ必要がある。それが完成するまでは、対外的な紛争、ことに中国とゴタゴタを起こしてはいけない。それには、蒋介石を刺激することはせず、政府間交渉で、蒋介石に排日停止、日本との共同防共、満州国承認、少なくとも黙認を約束させる。

田中 隆吉(たなか・りゅうきち)

明治26(1893)～昭和47(1972)島根県生まれ。陸軍少將。昭和7年上海駐在中、日本人僧侶殺害の謀略で上海事変を起こし、その間に満州国を建国させる。兵務局長の時に東条陸相と対立し17年予備役。東京裁判で検事側証人として先輩、同僚を告発する暴露的証言をした

徳 王(とく・おう)

1902～1966 内蒙古王族の家に生まれ、自治権獲得運動に当たった。昭和14年、日本の支援下に蒙古聯合自治政府を樹立し主席に就任した。敗戦後、捕えられ中国に送還されたが、38年釈放

…… 抗日の氣勢を一段と盛り上げることに ……
徳王軍敗走に、国民政府は「中国軍大勝利」と宣伝した。初めて関東軍を破ったというので、北京でニュース映画が上映されると満員の観衆は、手を叩き床を踏み鳴らして興奮した。

— 石原、戦後の反省の弁 —

「支那駐屯軍増強という方法をとらず、統制の威力によって関東軍に手を引かせるようにすればよかった」しかし、「謀略により機会を作成し、軍部主導となり国家を強引する」— こんな乱暴な筋書きを作って満州事変を起こし、独断専行、統制を無視してきたのは石原だった。しかも陸軍の参謀の間には一種の「石原現象」が起きていた。石原の華々しい成功が、「結果良ければ全て良し。機会さえあれば俺たちも」と、功名心、出世欲を掻き立てた。

▽石原は「綏遠事件」が起ると

関東軍司令部(新京)に 飛行機で飛び
ストップを かけようとしたが
武藤章大佐(鐵)から

「石原さん、我々は貴方が満州でやられたことを、しているに過ぎませんよ」

●「国共内戦停止・一致抗日」に纏めた「西安事件」

「西安事件」のスクープ

「支那に一大事変勃発 張学良軍の為に 蒋介石氏監禁さる 西安に突如兵乱起こる」

世界を驚かせたスクープを打電したのは、同盟通信上海支社長・松本重治だった。南京支局から「蒋介石が、洛陽から西安に向かったまま連絡がとれない。何かあったのではないか」

通報を受けた松本は、長年の上海勤務で培った情報網に当たり、監禁の事実を掴むと、昭和11年12月12日夜10時過ぎ、東京に打電した。

〔西安〕陝西省の省都。漢、隋、唐の都として栄えた長安

…… 毛沢東率いる共産軍は ……
1万2500キに及ぶ苦難の長征を終えて陝西省 ……

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948) 熊本県生まれ。陸軍中将。昭和11年陸軍省軍務局高級課員の時、二・二六事件直後の広田内閣組閣人事に干渉。関東軍参謀を経て12年3月参謀本部作戦課長となり、支那事変を拡大。14年軍務局長に就任、日独伊三国同盟、大政翼賛会結成を推進。18年近衛第2師団長。19年第14方面軍(駐島)参謀長。A級戦犯として処刑された

松本 重治(まつもと・しげはる)

明治32(1899)～平成1(1989) 大阪生まれ。昭和7年新聞聯合(のりんくわい)上海支社長。15年同盟通信編集局長。戦後27年に国際文化会館を設立し、専務理事、理事長。51年文化功労者。著に「上海時代」

張 学良(ちやう・がくりやう)

1901～2001 張作霖の長男。昭和3年6月父が関東軍に爆殺された後、国民政府と提携、陸海空軍司令に任ぜられたが、満州事変で満州を追われた。11年、反共戦を指揮しているとき「西安事件」を起こし、抗日民族統一戦線結成を促す。軍法会議で禁固10年の判決を受け戦後も長く台湾で軟禁状態に置かれた。平成3年に名誉回復しハワイで死去

毛 沢東(もう・たくとう)

1893～1976 中国共産党に参加。紅軍を組織し、昭和6年瑞金で中華ソビエト共和国臨時政府主席に就任。9年長征を敢行、根拠地を延安に移動。支那事変で国共合作し抗日戦を指導。戦後、蒋介石を打倒し、24年中華人民共和国を建設、国家主席に就任した。34年から党主席に専念したが、41年文化大革命を起こし、再び全権を掌握。死後、晩年の指導の誤りを指摘された

北部の延安に辿り着いて1年余り、軍の再建に躍起になっている時だった。昭和9年10月国民政府軍に包囲攻撃されて江西省瑞金の根拠地を放棄。戦いながら四川、雲南の4000㍍クラスの険しい山々を越え、大河を渡って移動した。出発時30万の兵力は、3万に激減していた。

▽蒋介石は 12月4日 共産軍の息の根を止めようと張学良軍の攻撃督励に 西安に向かった

▽張学良は「戦うべき相手は日本軍だ」

蒋介石が 聞き入れないので

12日朝 軍隊で宿舎を包囲し 監禁した

●中国共産党は、素早く反応した

▽スターリンの指示も あったと言われるが

「蒋介石は殺さずに、

抗日統一戦線の先頭に立てる」

▽周恩来は 17日 飛行機で西安に飛び

蒋介石の 中国での指導的地位を 認めた上で

「一致抗日」の必要を 訴え

張学良には 蒋介石の解放を 要請した

▽25日 解放された蒋介石は

西安攻撃に向かう政府軍に 撤退命令を出し

「国共合作」は 内戦停止という形で 動き出した

▽昭和12年2月から始まった 停戦会議では

共産軍を 国民政府軍事委員会の指揮下に

▽毛沢東も 共産党の全国代表者会議で

「幾百万、幾千万の大衆を

抗日民族統一戦線に引き入れるために戦え」

●中国の新情勢は、中国対策の再検討を促すことに

▽広田弘毅に代わり 林銑十郎内閣(昭和12年2月2日)

石原は「全軍一致」で宇垣内閣を阻止した

元陸相宇垣一成に組閣の大命が下ると、石原は陸軍上層部を突き上げ、陸相を送らないことで「宇垣内閣」を流産させた。しかし、陸軍部内で飛ぶ鳥も落とす勢いだった石原の威勢もここまでだった。

石原の思惑は、首相に部下の言いなりの林を据え、陸相を満州事変以来の同志で「知謀の石

スターリン(Iosif V. Stalin)

1879~1953 ソ連共産党書記長。大量粛正で個人独裁を確立。昭和11年、人民委員会議長(首相)となり、対独戦を指導。死後、専制支配を批判された

周 恩来(しゅう・おんらい)

1898~1976 日本に留学後、フランスに留学して中国共産党フランス支部を組織。人民共和国成立と共に政務院(副総理)総理兼外交部長。亡くなるまで総理

広田 弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)~昭和23(1948)福岡県生まれ。外務省に入り、欧米局長などを経て昭和5年ソ連大使。8年斎藤内閣外相。岡田内閣にも留任し対中国和協外交を推進。11年二・二六事件後に首相に就任し、軍部大臣現役武官制を復活、日独防共協定調印。12年近衛内閣外相。東京裁判では文官中ただ1人絞首刑になった

林 銑十郎(はやし・せんじゅうろう)

明治9(1876)~昭和18(1943)石川県生まれ。陸軍大将。昭和5年朝鮮軍司令官となり、満州事変で越境問題を起こす。教育総監を経て9年斎藤内閣陸相。岡田内閣に留任、真崎教育総監を更迭し二・二六事件の一因に。12年2月首相に就任したが、4カ月の短命内閣に終わった

宇垣 一成(うがき・かずしげ)

明治1(1868)~昭和31(1956)岡山県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て大正11年清浦内閣陸相となり加藤、若槻、浜口内閣に留任、4個師団廃止の「宇垣軍縮」を実施した。昭和6年朝鮮総督。12年1月組閣の大命を受けたが陸軍の反対で断念。13年近衛内閣外相兼拓務相。戦後2年参院選全国区に最高点当選

原、実行の板垣」と謳われた板垣征四郎(麒麟齋長)にして、対ソ軍備完成、統制経済推進の構想を実現しようとした。ところが、次官の梅津美治郎は陸士15期(板垣16期)、陸大卒も明治44年(板垣5年)。石原の陸軍旧来の序列思想無視は、到底黙過できないものだった。

林首相が「板垣陸相」を要請すると、梅津は三長官会議(陸相、参謀総長、教育総監)で中村孝太郎中将推薦を決定させ、要請を拒否した。中村は就任直後に病気辞任し杉山元が9日付で陸相に就任、陸軍の主導権は梅津ら新統制派が握る形に。

▽「何もせんじゅうろう内閣」4ヵ月の短命内閣
唯一の収穫が 外相に起用した佐藤尚武

「浦島太郎外相」

佐藤は31年間の外交官生活で、東京勤務は林内閣外相とその後の5年間だけ。長い外国勤務で得た信念が、「戦争は決してソロバンに合わない。日本はどんな状況に追い込まれても、平和は守らねばならない」

▽佐藤は「戦争回避・平和維持」を入閣の条件
林首相 杉山陸相に
「中国との国交調節を、一部世論との衝突を
覚悟して断行する必要がある」と申し入れた

佐藤は率直に所信を表明した

(3月8日 麒麟) 中国外交の行き詰まりを打開するには、「日本がこれまでの中国に対する優越感、侮蔑感を払拭し、対等の国同士として交渉しなければダメだ」

(12日 麒麟) 「戦争勃発の危機に直面するもしないのも、それは日本自体の考え方によって決まる。日本が危機を欲しないなら、その危機はいつでも避けられる」

●「華北分離工作」中止へ政策転換

▽4月16日 四相会議(外務・大蔵・麒麟)で「北支指導方策」

「北支指導方策」

「北支ノ分治ヲ図リ若クハ支那ノ内政ヲ紊ス」

板垣 征四郎(いたがき・せいしろう)

明治18(1885)～昭和23(1948)岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年5月関東軍高級参謀となり石原と共に満州事変を起こす。関東軍参謀長、第5師団長を歴任。13年近衛内閣陸相。支那派遣軍総参謀長、朝鮮軍司令官の後、20年第7方面軍司令官。東京裁判でA級戦犯として刑死

梅津 美治郎(うめが・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。参謀本部総務部長を経て昭和9年支那駐屯軍司令官。11年陸軍次官となり、二・二六事件後の肅軍人事を進めた。第1軍、関東軍司令官歴任。19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑

中村 孝太郎(なかむら・こうたろう)

明治14(1881)～昭和22(1947)石川県生まれ。陸軍大将。支那駐屯軍司令官、第8師団長などを経て昭和12年林内閣陸相となるも病気辞任。13年朝鮮軍司令官

杉山 元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。陸軍次官、参謀次長、教育総監歴任。昭和12年近衛内閣陸相となり、支那事変拡大を支持した。15年参謀総長。19年小磯内閣陸相。20年本土決戦に備えた第1総軍司令官。敗戦翌月、ピストル自決。「杉山手記」を遺す

佐藤 尚武(さとう・なおたけ)

明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。旧津軽藩士の子。ハルビン総領事、スイス公使館1等書記官、フランス大使館参事官、国際連盟全権を経て昭和8年フランス大使。12年林内閣外相。17年ソ連大使。戦争末期、ソ連への和平仲介を命ぜられたが「無条件降伏のほかなし」と強く主張。22年参院議員。24年同議長

虞アルカ如キ政治工作ハ之ヲ行ハス以テ内外ノ疑惑並ニ支那ノ対日不安感ノ解消ニ努ム」
「南京政権(馮政府)ニ対スル施策ニ当リテハ同政権ノ面子ヲ考慮シ同政権ヲシテ国民ノ手前抗日標榜ノ已ムナキニ至ラシムルカ如キ措置ヲ避ケルト共ニ特ニ支那民衆ヲ対象トシ如実ニ共存共栄ヲ具現スルカ如キ文化的経済的工作ニカヲ注キ以テ日支両国国交調整ニ資ス」

▽陸軍の転換には 石原(3月1日附で機謀)の協力も

石原は「西安事件」に 参謀本部の方針

「支那駐屯軍には政治、経済的な指導はやめさせ北京には外交機関を置く。冀察政権との交渉は融和了解を主として、強いて日本の権益を獲得するような行動は避ける」

▽近衛内閣外相には 元首相の広田弘毅

…… 佐藤外交には陸軍・右翼から強い不満 ……
「あれは舶来日本人だ。満州を返せ、台湾を返せと絶叫する支那と、親善・提携が出来ると思っているのか」

関東軍参謀長東条英機も6月9日、参謀本部に強硬な意見電報を打ってきた。「現下支那の情勢を、対ソ作戦準備の見地より観察せば、我が武力之を許さば先ず南京政権に対し一撃を加え、わが背後の脅威を除去するを以て、最も策を得たるものと信ず…南京政権に対し我より進んで親善を求むるが如きは其の民族性に鑑みて却て彼の排日侮日の態度を増長せしむ」

●北京では、反日感情が急速に高まっていた

▽視察や連絡に行った将校も 口々に

「日中両軍著しく緊張し一触即発の情勢にある」

▽河辺虎四郎大佐(参謀本部戦争指導課長)は

6月に入って 妙な噂を 耳にするようになった
「近く北支で柳条湖事件(瀾駮)と同じような事が起こる。支那駐屯軍の参謀が計画している」

▽柴山兼四郎大佐(陸軍部参謀)に 実情調査させたが

「盧溝橋付近駐屯の小隊でも一泊して話し合ったが、小隊長以下よく自重しており心配ない」

室伏高信の言葉(「日本論」12年4月号)

有り体に云えば、我々は今の外務省に、これだけの気力がある者があろうとは思っていなかった。日本の外務省は軍部の一部局でしかないと我々は考えてきたし、また実際においてもその通りであった。この空気のうちにあつて佐藤外相が躊躇することなくその所信を披瀝したことは、ともかく近来の大出来であった。

室伏 高信(むろふせ・こうしん)

明治25(1892)～昭和45(1970)神奈川県生まれ。評論家。時事新報記者などを経て「改造」「日本評論」の編集に携わる

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。関東軍憲兵司令官を経て昭和12年同参謀長。13年陸軍次官。15年近衛内閣陸相となり日米交渉で中国撤兵に反対、総辞職に追い込む。16年首相に就任し陸相、内相を兼任、対米英開戦の最高責任者に。憲兵政治、翼賛選挙により独裁体制を固めたが、戦局悪化、19年に参謀総長を兼務するもサイパン陥落で7月総辞職。戦後ピストル自決を区ったが失敗。A級戦犯として絞首刑

— 盧溝橋を演習地として —

歩兵第1連隊が駐屯した豊台は豊かな耕作地。「ここで演習すれば反日感情を刺激する」との配慮から、盧溝橋一帯の荒れ地を買収しようとした。

盧溝橋も北京—漢口の鉄道の要衝。国民政府は地主に土地売却を禁じたが、交渉が纏らないうちに演習地として使い始めたため、第29軍の兵士が日本の将校を殴ったとか、小競り合いが続くようになっていた。

▽河辺正三少将(支那駐屯軍歩兵旅団長・河辺の兄)も「安心せよ」

▽しかし、その後も「7月7日の晩」と

日時まで特定して噂は絶えなかった

▽今井武夫少佐(北京駐在武官補佐)も7月6日夕方

中国軍保安総司令から変な電話

「日中両軍は今日午後三時頃盧溝橋で衝突し、目下交戦中だ」今井が否定しても「間違いない」

▽今井は後になって回想している

「多年にわたる交友から考え、翌七日の陰謀計画を六日に仮託した好意的な予備通報では…」

▽松本(剛鬚)も駐屯軍司令部(天津)を訪ねた

橋本群少将(參謀)は「宋哲元とは時々話しているし、第29軍の方から仕掛けるようなことはないと思う。むしろ日本側の方に多少問題がある。大陸浪人や一旗組が事あれかしと七月七日に事件が起こるとか、いろんなデマを飛ばしている。司令部では嚴重に取り締まっているし、仮に事件が起きても、局地解決出来ると思うのでご安心頂きたい」

▽松本がただ一つ不安に感じたのは

司令官田代皖一郎中将が危篤状態だったこと

▽昭和天皇も心配されていた

●なぜ、夜間演習という火中に油を注ぐようなことを

▽演習自体は北京議定書の規定

「戦闘射撃の場合を除き、自由に訓練・演習を行なうことが出来る」により合法的だったが…

▽外国軍隊はきらびやかな軍服でパレード

日本軍だけが日夜実戦さながらの演習

ロンドン・タイムズ北京特派員が

「これで事件が起きなければ奇跡だ」

7日だけでも演習を止められなかったのか

第3大隊は9日に検閲を控えていた。陸軍はソ連との戦いに備え、夜間・払暁攻撃に重点を置いた訓練を強化していた。支那駐屯軍も、千葉歩兵学校から教官を招いて戦闘方法を学んでいる最中。8日は兵器の手入れに当て、7日を仕上げの演習日としたのだが、陸軍中央で検閲延期、演習見合わせの措置をとるべきだった。

河辺 虎四郎(かへべ・とらしろう)

明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生まれ。陸軍中將。昭和12年參謀本部戦争指導課長となり、支那事变拡大に反対。第2航空軍司令官、參謀次長を歴任

柴山 兼四郎(しばま・かねしろう)

明治22(1889)～昭和31(1956)茨城県生まれ。陸軍中將。中国関係の情報通として知られ、昭和12年陸軍省軍務課長。第26師団長、汪兆銘政府顧問、陸軍次官

河辺 正三(かへべ・まさかず)

明治19(1886)～昭和40(1965)富山県生まれ。陸軍大將。虎四郎の兄。昭和11年支那駐屯軍歩兵旅団長となりビルマ方面軍司令官、航空総軍司令官など歴任

今井 武夫(いまい・たけお)

明治33(1900)～昭和57(1982)長野県生まれ。陸軍少將。昭和10年北京駐在武官補佐官。參謀本部支那課長、支那派遣軍參謀、同總參謀副長など歴任

「昭和天皇独白録」から

何とかして、蒋介石と妥協しようと思ひ、杉山陸軍大臣と閑院宮參謀総長とを呼んだ。若し陸軍の意見が私と同じであるならば、近衛に話して、蒋介石と妥協させる考であった。これは満州は田舎であるから事件が起つても大した事はないが、天津北京で起ると必ず英米の干渉が非道くなり彼我衝突の虞があると思つたからである。

參謀総長と陸軍大臣の見透しは、天津で一撃加へれば一ヵ月以内に終るといふのであった。これで暗に私の意見と違つてゐる事が判つたので、遺憾乍ら妥協の事は云ひ出さなかつた。かゝる危機に際して盧溝橋事件

▽余りにも 無神経だった

陸軍全体に「中国軍は弱い。一撃すれば…」

近衛首相にもあったし 国民全般にも 強かった

●近衛内閣誕生は、昭和12年6月4日

▽「衆望を担って」日本中が 若き宰相を歓迎した

— 岩淵辰雄は書いている —

一般の人気は湧くようであった。五摂家筆頭である青年貴族の近衛が総理大臣になったということが、何かしら新鮮な感じを国民に与えたのだ…近衛があつた弱々しい感じの口調でラジオの放送などすると、政治に無関心な、各家庭の女、子供まで「近衛さんが演説する」といって、大騒ぎしてラジオにスイッチを入れるという有様だった。 (「敗るまで」)

▽二・二六事件の後 日本の社会全般に 陰鬱な気分

新聞は 早くから「近衛時代の幕明け」

「近衛なら、新しいことをやってくれるだろう」

軍部や右翼 政党から 知識人までが

近衛の清新さ 知性 革新性に 期待した

▽徳富蘇峰は「雲晴れて日輸出でたる如し」

アララギ派の俳人 五百木瓢亭は

「五月晴れの富士の如くあらせられ」

●若くして注目を集めた「英米本位の平和主義を排す」

▽第1次世界大戦が終わった直後 大正7年12月

27歳の青年が 英米追随批判の論陣

▽近衛が 後に 満州事変肯定の立場をとったのも

「持たざる国日本」の

「生きるための行動」として 止むを得ないと

— 哲学者が志望だった —

ナショナリストの一面は、近衛が12歳の時40歳で死んだ父・篤麿の影響が大きかった。母は生後9日目に産褥熱で亡くなり、篤麿が再婚した妹の貞子(もとこ)に育てられたが、大きくなるまで貞子を実母とっていて、「それを知ってから世の中の事は嘘だと思ふようになった」

篤麿は政治運動に力を入れた余り、多くの借財を作っていた。亡くなると、世話になった人

が起つたのである。之は支那の方から仕掛けたとは思はぬ、つまらぬ争から起つたものと思ふ。

岩淵 辰雄(いわぶち・たけお)

明治25(1892)～昭和50(1975)宮城県生まれ。政治評論家。読売、国民、東京日日記者として活躍。戦後は読売新聞主筆

徳富 蘇峰(とくみ・そほう)

文久3(1863)～昭和32(1957) 熊本県生まれ。本名猪一郎。進歩的平民主義の立場に立ち、明治23年国民新聞創刊。大正に入ってから評論家として活躍、「近世日本国民史」で昭和12年学士院賞。18年文化勲章受賞。皇室中心の国家主義思想は、戦争中の言論・思想界の一つの中心となり、戦後は熱海に蟄居した

五百木 瓢亭(いほぎ・ひょうてい)

明治3(1870)～昭和12(1937) 愛媛県生まれ。本名良三。ジャーナリスト、俳人。明治28年新聞「日本」編集長。近衛の父・篤麿の国民同盟会に参加し大アジア主義を唱え、雑誌「日本及日本人」社主

……「英米本位の平和主義を排す」……

戦後は民主主義・人道主義が盛んに昂揚されるだろうが、これは人間の平等感に基づくものであって、その発達は望ましい。だが、英米政治家の説く民主主義、人道主義は彼等の利益に奉仕するものに過ぎず、国際連盟にしても同じである。欧州戦争は現状維持を便利とする既成の強国と、現状打破を便利とする未成の強国の争いであつて、前者は平和を叫び、後者は戦争を唱えた。英米の平和主義は現状維持を有利とする者の事なかれ主義であつて、必ずしも正義人道にかなっていない。

日本は連盟に加入するに当って、少な

たちが手の平を返したように「金を返せ」。「こんな事から、私の心の中には、知らず知らずの間に社会に対する反抗心が培われていた」

東京大学を半年でやめ、西田幾太郎や河上肇の哲学に憧れて京都大学に移った背景には、両親の死があったようだ。

▽元老西園寺公望も 将来の首相候補

自分の後継者として期待し 育ててきた

— 林内閣は4ヵ月の短命内閣に —

陸軍の意向で政務次官制度を廃止したが、政党の反発を買い予算審議で事務次官(齋藤)がウロウロするだけ、重要法案が軒並み不成立。林首相は昭和12年3月31日、突然衆議院を解散したが、総選挙(4月30日)の結果は、民政党、政友会が354議席と絶対多数を占め、社会大衆党も20議席から37議席。与党的立場の昭和会、国民同盟は30議席と5議席減だった。

林が地方長官会議で「政党は本来の姿を忘れて」と挑戦的な発言をしたため、民政党と政友会は倒閣運動を申し合わせ、5月28日内閣総辞職を要求する共同声明を発表した。

▽第2次護憲運動(大正13年)以来の 野党攻勢の中

林は「いま内閣を投げ出すことは、

軍部が政党に負けたことになる」と

杉山陸相を後継にしようと 画策した

▽西園寺は「宇垣内閣」流産に「後継推挙辞退」を

洩らしていたが 杉山案を一蹴

「どうしてもこの場合、近衛を出したらどうか。

自分は今まで近衛を出すことに躊躇しておったし、またなるべく出たくないと思っておったが、自分にご相談とあらば、信念に基づかない者に賛成するわけにはいかん。近衛より

ほかに適任者がないと思う」

▽西園寺の一言で 6月1日 近衛に組閣の大命

●陸軍でさえ近衛内閣を歓迎、条件は揃っていたが…

▽ムードは「革新的」だが

「確信」を持たないのが この貴公子のスタイル

くとも経済帝国主義の排除と人種無差別待遇を先決問題として主張すべきである。これが認められねば、領土狭く資源乏しく輸出市場も貧弱な日本は、自己生存の必要に迫られて、ドイツのように現状打破の挙に出なければならなくなる。(雑誌「日本及日本人」大正7年12月号)

近衛 篤磨(このゑ・あつまる)

文久3(1863)～明治37(1904) 京都生まれ。文磨の父。明治28年学習院長となり29年貴族院議長。大アジア主義を唱え、「同文同種・諸邦親善」の見地から、31年東亜同文会を結成、上海に専門学校「東亜同文書院」を設立した。対露強硬外交を主張したが、日露開戦の直前死去

西田 幾太郎(にしだ・きさう)

明治3(1870)～昭和20(1945) 石川県生まれ。大正2年京大教授。明治44年「禅の研究」を著し、日本の哲学の指導者と言われた。昭和15年文化勲章受賞

河上 肇(かわかみ・はじめ)

明治12(1879)～昭和21(1946) 山口県生まれ。大正4年京大教授。翌年、大阪朝日新聞に「貧乏物語」を連載。昭和7年共産党に入党。検挙されても非転向を貫き、12年に出獄後は京都で「閉戸閑人」と称して、自叙伝などの執筆に専念した

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相となり、陸軍の2個師団増設要求を拒否して総辞職。晩年は、最後の元老として国際協調に努め、後継首相を奏請

…… 阿部真之助の「近衛文磨論」 ……………
…第一に案ぜられるのは、彼の精神力

近衛を評して

会して議さず、議して決さず、決して行わず

▽「歓迎一色」の 近衛内閣誕生直後

阿部真之助は「凶暴な波風に堪えられるか」

▽大学生の時から もう公爵 貴族院議員

役人もせず 閣僚経験なしに首相は 近衛だけ

▽「首相になりたくない」と 逃げ回り

愛人の家に隠れているところを 木戸幸一に

「二度の大命拝辞は臣下の道でない」

▽難しい問題に ぶつかるたびに

寝込んでしまい すぐ「辞めたい」と洩らす

▽「側近三千人」 右から左まで 幅広い交友

「昭和研究会」

京大時代の同級生後藤隆之助は、近衛が首相になった時のためにと昭和8年秋、学者やジャーナリストを集めて、国策研究機関「昭和研究会」を設立した。日本では最初の本格的な知識人ブレイク。第1次近衛内閣で書記官長(館長)になった風見章も研究会に属する代議士。

▽ある人は「ファッションに対する最後の砦」

ある人は「ファッションに達する最後の飛び石」

▽阿部は 近衛を「実行性のないファッション」

▽首相就任後 真っ先に 考えたのが

国内の対立を なくすため

二・二六事件関係者や左翼を 大赦により放免

▽「昭和研究会」は 支那問題委員会

「西安事件」の影響を 話し合っている最中

中国政策に 具体的な構想を持たないまま

内閣成立33日目に 盧溝橋事件が勃発した

●8日午前5時54分、参謀本部に第一報

▽風見が「杉山陸相は、わが方にとっては全く偶発事件である、と言っている」と 報告すると

近衛は とっさに 反問した

「まさか、日本陸軍の計画的行動でなかろうな」

▽石射猪太郎(外務館長)も「また、やりやがったな」

日本軍の謀略は、なかったのでは…

田代軍司令官が危篤状態。北京の主力部隊は

と、ならびに彼の体力が、非常時という普段より凶暴な波風に堪え得るかの問題だ。…近衛公は右の極から左の極に到る、広い交友を持っている。そしてよく他人の意見を聞き、自ら語ること簡潔で、言葉に含蓄が多いゆえに一反次に言葉の表現が曖昧とも言い得る。— それぞれの人々は、それぞれの立場において、彼を自分達の味方だと思い込ませてしまうのであった。

彼が仮装会で、ナチス独逸のヒットラーに扮したのも、仮装の裏に、彼の本心が潜んでいたのだった。ファッションは元来実行者であって、実行した後に取っつけた理論がすなわちファシズムなのであるが、近衛は先に理論を考える。理論ぬきで猛進するごときは、彼の性格から見て、絶対にできないことなのであろう。さればこそファッションを恐ること、虎のごとき我国のブルジョア達も、近衛内閣の出現を見て、いっこう恐怖した模様がないのみか、むしろ歓迎している模様さえあるのだ。これは彼の実行性のないファシズムを見抜いているからである。

理想家肌は、彼の性格と環境によって培われたもので、実生活の苦しみを知らぬものが、空想的となるのは自然の成り行きで… 善良さや、良心的のことは、貴族の特徴ではあるが、その半面実行力においてはなはだ欠けているのを忘れてはならない。生き代り死に代り、喰いついたら放さぬ執念は、生活の困難が教えるのであろう。生活を持たないあの階級の人々には、もっともとほしい素質なのだ。だから思うに近衛内閣の人気も、何事かなすだろうとする、積極性のものでなく、たいした悪い事はしないだろうという、消極的のものが多いのであろう。(文芸春秋 昭和12年7月号)

通州で徹夜の演習をやっていて、実質的責任者の河辺正三旅団長はその検閲に出張中だった。日本側で謀略を計画したのなら、発砲に即応できるよう、万全の態勢をとっていたらう。第8中隊は夕食を早めに食べたきりで31時間、空腹を抱え炎天下で戦闘した。中隊長以下、演習の装備で鉄兜もかぶっていなかった。

中国共産党の謀略説も

8日朝「全国の同胞諸君！北京天津危うし、華北危うし、中華民族危うし。日本の侵略者の新たな進攻に抵抗し、中国から追い返そう！」と全国に対日開戦を促す電報を送った。

毎晩のように不審な銃声がするので、今井少佐(北京駐在武官補佐官)が29軍の将校と駆け付けると、男女の学生が爆竹を鳴らしている。止めると、「共産党北方局の命令でやっているのに、なぜ邪魔するのか」北方局責任者は劉少奇。

牟田口連隊長も「劉少奇が北京に来ていたと聞いて、共産軍の陰謀だと思った」

拡大しようとした者は日本側にも

茂川秀和少佐(天津特務機関)は「両軍の衝突拡大のため、部下を使って爆竹を鳴らさせたが、不思議なことに我々以外にも同じようなことをやっている連中がいた」

関東軍も8日午前8時10分、異例の早さで声明を出した。「我が関東軍は多大の関心と重大なる決意を保持しつつ厳に本事態の成行を注視す」9日夕には辻政信大尉(少佐)がやって来て、牟田口連隊長に「関東軍が後押しします。徹底的に拡大して下さい」辻は北京城の広安門に上がって、中国兵に向けピストルを発砲した。

寺平忠輔大尉(北京特務機関補佐官)は、謀略説否定

清水中隊長たちは異口同音に「弾丸は全て龍王廟南側の堤防上から飛んで来た」日中両軍の距離は千仞ならず、しかも平坦地。その間に銃を持った工作員が潜入するのは不可能。

29軍兵士が警戒感を強めているところへ、軽

阿部 真之助(あべ・しんのすけ)

明治17(1884)～昭和39(1964)群馬県生まれ。東京日日新聞(のち毎日)に入社、社会、経済、学芸部長を歴任し昭和13年取締役。退職後、毒舌の人物評論で知られた。30年菊池寛賞受賞。35年NHK会長

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任。15年内大臣。天皇側近の重臣として力を揮い、東条を首相に奏請。戦争末期は終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固。30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

後藤 隆之助(ごとう・りゅうすけ)

明治21(1888)～昭和59(1984)茨城県生まれ。京大在学中に近衛と親交を結び、昭和8年「昭和研究会」を設立し、近衛のブレーンに。大政翼賛会組織局長

風見 章(かざみ・あきら)

明治19(1886)～昭和36(1961)茨城県生まれ。大阪朝日記者、信濃毎日主筆を経て、昭和5年衆院議員。第1次近衛内閣書記官長。第2次内閣法相。戦後、27年衆院議員(社会派)。著に「近衛内閣」

ヒットラー(Adolf Hitler)

1889～1945 ドイツ総統。第1次大戦後、ナチ党党首となり昭和8年首相。一党独裁体制を確立、軍備を拡張、対外侵略を強行し14年第2次大戦を起こす。ベルリン陥落直前に自殺。著に「わが闘争」

石射 猪太郎(いしか・いのすけ)

明治20(1887)～昭和29(1954)福島県生まれ。昭和12年外務省東亜局長。オランダ公使、ブラジル大使を経て、敗戦時はビルマ大使。著に「外交官の一生」

機関銃を空砲射撃。「来た」と思った瞬間、思わず引き金を引いてしまった。寺平は「最初の発砲が2、3発で終わったことから、決して他意があったとは思われない」続いて集合ラッパが鳴り、「今度こそ攻撃開始のラッパだ。撃て、撃て」となったのではないか。

●問題は、日本が局地事件としてどう処理するか

▽陸軍中央部は 拡大派 不拡大派に 割れていた

柴山(戦艦長)「厄介な事が起こったな」

武藤(作戦長)「愉快な事が起こったね」

▽陸軍省(参謀) 杉山陸相以下 楽観的な一撃派

▽参謀本部 石原(作戦長) 河辺(戦術指導長)は 不拡大派

武藤のように「千載一遇の好機だ」拡大派も支那課長(永澤比呂佐)「動員をやったら、必ず上陸しなければならぬと考えるから、控えめになる。船を持って行くだけで、北京は参るだろう」

▽総長は閑院宮 次長は病氣入院中

石原が 参謀本部を動かす力を持っていたが武藤と 大声でやり合う声が 廊下の外まで 作戦部内さえも 意思統一できなかった

▽参謀本部は 8日午後6時42分

支那駐屯軍司令官に「事件ノ拡大ヲ防止スル為 更ニ進ンテ兵力行使スルコトヲ避クヘシ」

▽この段階では 石原の主張が通った

「武力行使は局面拡大につながる。ひとたび日中抗争に陥れば、果てしない荒野に無限の進軍命令を出すようなものだ」

▽9日の閣議も「現地解決・不拡大」方針を 決定した

●ところが10日になると、出兵へ向けて急ピッチで

▽支那駐屯軍は 6千人足らずなのに

中国軍は 第29軍を中心に20万

▽夕方「蒋介石軍北上」情報が 大げさに伝えられ

「北京、天津の在留邦人1万2千人の生命、財産を どうやって守るのか」 出兵論が勢いづいた

▽石原も 武藤の動員案に 決済の判を捺した

内地から3個師団 朝鮮軍から1個師団

関東軍から2個旅団 計5個師団の動員

劉 少奇(りゅう・しょうき)

1898～1969 モスクワに留学し、労働運動を中心に中国・革命運動を指導。昭和34年国家主席。文化大革命で批判され、党籍剥脱、一切の公職から追われた

辻 政信(つじ・まさのぶ)

明治35(1902)～昭和43(1968)石川県生まれ。陸軍大佐。昭和12年関東軍参謀となり、ノモンハン事件で強硬論を主張。17年参謀本部作戦班長。シンガポール・華僑虐殺、パターン・死の行進も辻の発案と言われる。バンコクで終戦を迎え、戦犯指名を恐れ僧侶に変装して逃亡を続け、23年帰国。逃走記録「潜行三千里」はベストセラーに。27年衆院議員。34年参院議員。36年東南アジア視察中、ラオスで消息を断ち、43年に死亡宣告

寺平 忠輔(てらだいら・ただすけ)

明治34(1901)～昭和43(1968)静岡県生まれ。陸軍中佐。東京外語で中国語を学び、昭和11年北京特務機関補佐官。停戦交渉・不拡大に努力。14年支那派遣軍総司令部付。著に「盧溝橋事件」

石原は神経衰弱気味だった

体が弱いうえ、徹夜続きで目は真っ赤。河辺が部下に「朝の間は部長の言う事は相手にするな」と言うほど。

「万一、手薄のまま包囲、全滅させられたら…」一 軍人の本能、作戦部長として責任感が頭をもたげたのだろう。河辺が「不拡大で行くなら内地動員はかけない方がいい」と、反対すると、石原は苦渋に顔をゆがめながら、机の上の地図を指差し、「この配置を見る。貴公の兄貴の旅団が、全滅するのを見送っていていいと思うのか」

- 11日、緊急臨時閣議が招集され、忙しい日曜日に
 - ▽石原は 午前8時過ぎ 近衛を 永田町の私邸に訪ね
「本日の閣議で動員案を否決してくれ」
 - ▽太田一郎(外務省東亞局長事務官 戦後吉田内閣外務次官)には
重安中佐(陸軍省軍務課員)から電話 「陸軍省内の大勢
いかんともしがたく、軍務局長も動員案に判
を捺してしまった。この上は閣議で、外相にそ
の決定を阻止して貰うよりほかはない」
 - ▽石射(勲長)は すぐ 東京駅に駆け付け
鶴沼から上京して来た 広田外相に
「内地師団の動員決定だけでも、中国側を刺激
する。陸軍に頼まれるまでもなく絶対に反対
して頂きたい」 広田も「無論反対する」
 - ▽閣議に先立つ五相会議で 米内光政海相は「派兵
が事件を拡大することは火を見るより明らか」
杉山陸相は「出兵の声明だけで、
中国側の謝罪と将来の保障を確保できる」
 - ▽結局「あくまで事件不拡大、現地解決を強調する。
動員も派兵する必要がなくなれば、直ちに中止」
 - ▽二点を確認し 午後2時からの閣議でも
陸軍の動員派兵案は 承認された
 - ▽「北支事変」と呼ぶことも 決まった
 - ▽「自衛のため必要が生じた場合に限りという、
条件付の万一のための、準備動員だったから」
弁解する広田に 石射は「いたく失望した」

- 現地では、停戦への努力が続いていた
 - ▽11日正午頃には 冀察政権と ほぼ了解点に
橋本(駐韓公使)は「停戦協定の見込みが強い」
「現地軍としては、派兵の必要を認めない」
 - ▽電報は 閣議決定直後に 着いたが
内地師団動員を 見合わせただけで
満州 朝鮮からの派遣は 予定通り発令された
 - ▽夜8時には 現地停戦協定が 結ばれたが…

…… 杉山は「便所のドア」と陰口された人 ……………
「華北の形勢が樂觀できないし協定が守られ
る保証もない」と弁解したが、強く押された方
になびく大勢順応型の軍人。拡大派に押され、
現地の和平努力を無視してしまった。

石原の心の揺れ

後で「何となく薄暗がりの中で仕事
をやった気持ちだった」後悔してい
るが、近衛には異常な申し出が、陸軍
の無統制と映った。敗戦後、自殺する
まで盧溝橋事件を陸軍の謀略ではな
いか、と疑っていたというが、うっかり
乗って後で引っ繰り返されてはと
様子見をした。

米内 光政(よない・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生
まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭
和12年海相。15年首相となり、日独伊三
国同盟に反対、陸相辞職で総辞職。19年
小磯、鈴木内閣海相として終戦に尽力

河辺は近衛内閣の実態を嘆いた

昭和15年7月、竹田宮恒徳大尉に「近
衛首相、広田外相等、軍にオベッカを
使っていた政府であります。「軍はど
ういう風に思っているか」と心配す
る、非常に勇気のない政府でして、軍
に問うては事を決するというやり方
で、政治的に全責任を負い、戦うも戦
わざるも国家大局の着眼からやって
行こうというものはつくづくなかつ
たことを思います。広田さんは、相当
な見識を持った人でありましょけ
れども、何しろ、軍の意向を聞かな
ければ外務大臣としての仕事が出来
ないという状況で、「正しいと思うこ
とは貴方が強調し、実行されたらい
かがですか」と申し上げたことがある」

竹田 恒徳(たけだ・つねよし)

明治42(1909)～平成4(1992) 東京生ま
れ。元皇族。馬術に長じ陸軍騎兵学校教
官。戦後日本馬術連盟・スケート連盟会
長。昭和42年IOC委員。国際スポーツ
界に「プリンス・タケダ」と知られた

- 近衛は午後4時、裁可を得るため葉山の御用邸へ
 - ▽天皇は 政府の決定には 自分の考えと違っても従われるようにされてきたが 不満の様子は近衛にも分かったと見え 湯浅倉平(献臣)に「もしこの際、派兵に反対して陸軍の希望を容れない場合には、陸軍大臣は辞めなければならんし、従って内閣も辞めなければならん。結局自分が辞めても、誰かがまたこの地位に立たなければならないのであるし、とても軍を押さえて行く人はあるまいから、自分が責任をとってこれに当たるより仕方あるまい」
 - ▽近衛は 陸軍に コントロールされまいとして 先手を打って リードして行こうという意識

- 近衛が、出兵の先頭に立って旗を振った感じ
 - ▽午後6時24分「北支派兵二関スル政府声明」
 - ▽仰々しく 発表する必要はなかったのに 停戦交渉を纏め 一息ついていた今井少佐は「近衛の頭は狂っていないか」
 - 冀察政権は「日本は武力で威嚇するのか」
 - ▽政府の決意を示し「挙国一致、国論統一」に 夜9時から 首相官邸に 政財界 言論界の幹部を招き 協力を要請
 - ▽夜の官邸は お祭り騒ぎ
 - 石射は「政府自ら氣勢をあげて、事件拡大の方向に滑り出さんとする気配だった」

- 事態を悪化させた新任の駐屯軍司令官
 - ▽香月清司(かき・せいじ)中將は 12日着任
 - 記者会見で「断乎暴支膺懲の 軍司令官としての決意は固まっている」
 - ▽東京を発つ時は「不拡大」を納得していたが 赴任途中 京城で 小磯国昭(小磯司令官)から 強硬論を吹き込まれ 拡大派に 変心していた
 - ▽翌日 冀察政権に「北京城内の軍隊撤去」を要求 「実行出来なければ、冀察政務委員会は解散し、第29軍は河北省から撤去せよ」と 迫った
 - ▽関東軍 朝鮮軍の応援を得て 武力発動計画
 - ▽陸軍中央も驚いて 柴山(柴山)らを派遣
 - 手綱を引き締めたが 局地解決を難しくした

湯浅 倉平(ゆあさ・くらへい)

明治7(1874)～昭和15(1940) 山口県生まれ。大正12年警視總監。内務次官など歴任し、昭和8年宮内大臣。11年二・二六事件後内大臣。軍部の無理押しに抵抗

「北支派兵二関スル政府声明」

「…今次事件は全く中国側の計画的武力抗日なることもはや疑いの余地なし。思うに、華北治安の維持が帝国および満州国にとり緊要の事たるはここに贅言を要せざるところにして中国側が不法行為はもちろん排日・侮日行為に対する謝罪をなし、今後かかる行為をなからしむるための適当なる保障等をなすことは、東亜の平和維持上きわめて緊要なり。よって政府は本日の閣議において重大な決意をなし、華北派兵に関し政府として執るべき所要の措置をなすことに決せり…」

…… 拡大派の協定潰しも露骨に ……

陸軍省新聞班は、新聞社が協定成立の号外を発行しようとする、「まだ本決まりでない」と押さえ、深夜のラジオ放送で一中佐が勝手に作った原稿、「停戦協定が成立したとはいうものの、誠意に基づくものかどうかは疑わしく、全幅的信頼は寄せ難い。間もなく反古同然のものになることを覚悟しておかねばならない」―「陸軍当局談」として流した。

小磯 国昭(こいそ・くにあき)

明治13(1880)～昭和25(1950) 山形県生まれ。陸軍大将。昭和7年陸軍次官。朝鮮軍司令官を経て平沼、米内内閣拓務相。17年朝鮮総督。19年7月首相に就任したが戦局悪化で20年4月総辞職。A級戦犯として終身刑となり服役中に病死

- 蒋介石は17日、廬山で「最後の関頭演説」
 - ▽45分間の演説を終えた時 会場は興奮し
拍手が しばらく 鳴り止まなかったという
 - ▽蒋介石の「徹底抗戦」の 決意表明だったが
問題解決の鍵は まさに 日本にかかっていた

- 元老西園寺も、心配していた
 - ▽「国を思わぬ所に持っていっちゃ困る。やはり英米とは相当緊密な関係を保ちつつ、日本の国運を発展して行くことが日本の歩むべき道だ」
 - ▽原田熊雄(耕叢)が 13日朝 この心配を伝えるに
近衛を訪ねると 胃腸をこわし 寝込んでいた
 - ▽「外務大臣もまるで報告してくれないし、
陸軍大臣もいかにも頼りない」と 愚痴をこぼす
 - ▽原田は「一国の首相としての権威と責任を
放棄した無気力さを感じた」
 - ▽そこへ 風見(靨眼)が 石原(作麟)提案を伝えた
石原が 風見に 電話をかけてきて
「問題の解決は、近衛首相自ら南京に乗り込んで
蒋介石と膝詰め談判で片付けるのが一番いい」
 - ▽弱気になっていた近衛は 飛び付いた
「そうだ。自分は体が弱いので、いつまで御奉公
できるか、心もとなく思っている。だから命ある
間に、出来るだけ御奉公したいものだと思っ
ている。一つ南京に乗り込んで、蒋介石と直接
話し合ってみよう」
 - ▽さっく 風見に
飛行機と随行団の手配を 指示したが…

- もし、トップ会談が実現していたら…
 - ▽こじれた関係の修復は 早ければ早いほどいい
 - ▽タイミング的にも 絶好であり
杉山陸相にしても「近衛人気」を考えれば
正面切っては 反対できなかったろう
 - ▽会談成功の可能性は 極めて 高かったし
廬溝橋事件解決の 最初にして 最大のチャンス

- ところが、ここから近衛の優柔不断が顔を出し、石原提案は、いつの間にか立ち消えに
▽最初に ブレーキをかけたのは 風見だった

廬山(ろざん)

中国江西省北部にある名山。揚子江を望む景勝地、避暑地として知られ、蒋介石は夏の間、政府機関を移していた。世界遺産に指定。

蒋介石の「最後の関頭演説」

我々は弱国である以上、もし最後の関頭に直面すれば、国家の生存を図るため全民族の生命を賭すだけのことである。その時には、もはや我々には途中で妥協することは許されない。わが東北四省(遼)が占領されて、すでに六年の永きに及んでおり、いまでは衝突地点は、すでに北平の入口である廬溝橋まで来ている。もし廬溝橋までが他国から圧迫され占領されても構わないというのなら、わが五千年来の古都北平は第二の瀋陽(奉)になってしまうであろう。北平がもし瀋陽になるとすれば、南京がまたどうして北平の二の舞を演じないわけがあるだろうか。従って廬溝橋事変の推移は、中国全体の問題に関わるのであり、この事変を片付けるかどうか、最後の関頭の境目である。我々はもとより弱国ではあるが、わが民族の生命を保持せざるを得ないし、祖先・先人が我々に残してくれた歴史上の責任も負わざるを得ない。従ってどうしても止むを得ない時には、我々は応戦せざるを得ないのである。…廬溝橋事変を中日戦争にまで拡大させないように出来るかどうかは、まったく日本政府の態度にかかっており、和平の望みが断たれるか否かの鍵は、まったく日本軍隊の行動如何にかかっている。

風見の気懸かり

仮に近衛が蒋介石と話をつけたにしても、果たして陸軍が呑むかどうか。陸軍首脳部が、近衛の取り決めに従って、必ず現地軍を統制出来るというのでなければ、話し合いのつげようもない。その統制の保証が危ないというのでは、出掛けて行っても無駄な話だ。世界注視の的になるのに、ひどい恥さらしになる。

▽近衛も「瀬踏みするという意味で、

一足先に広田外相に行って貰ったらどうか」

▽風見が 広田に 相談すると

「さあ、そういう事はやってみても、どうかね」

▽風見も 相談無用と分かり

陸軍統制力の問題に 話題を変えると

「それだよ、問題は、南京へ出掛けるのもいいが、その前に陸軍の方がしっかりしてくれなくは」

▽風見は「うっかり乗れないという気持ちでいるうちに、南京行きの話は熱が冷めてしまった。石原から何度か「どうなったか」と催促してきたが、陸軍統制力のなさを言うのも嫌味だと思って、「南京行きは当分見合わせる」とだけ通告した」

▽近衛 広田 風見は

「まず、ぶつかってみる」べきだった

まさか「盧溝橋が日本の運命を決する

大問題になる」とは 思ってもいなかった

●現地の情勢は、ますます悪化していった

▽石原も 7月27日早朝「もう内地から師団を動員するほかない。遷延は一切の破滅だ」

▽27日の緊急閣議は 内地3個師団の動員を承認

▽28日早朝から 北京・天津地区で 全面攻撃開始

▽戦火は 上海にも 飛び火し

政府は9月2日「北支事変」を「支那事変」に

▽次々と重なった 行き違いを

修正すべきだったのか 近衛首相 広田外相

▽そして 支那事変泥沼化の 最大の原因は

中国に対する優越感 大国意識だったのでは…

▽「一撃食らわせれば」独りよがりの楽観論が

軍人だけでなく 国民全般にもあった

原田 熊雄(はらだ・くまお)

明治21(1888)～昭和21(1946)東京生まれ。日銀勤務、加藤(訥)首相秘書官を経て、大正15年元老西園寺の秘書となり、重臣・高官との連絡、政界情報の収集に当たった。著に「西園寺公と政局」

全面戦争突入への経過

7月25日 夜11時過ぎ、北京―天津間の中間にある郎坊駅で軍用電線が切断され、修理に派遣された1個中隊が第29軍に攻撃され、多数の死傷者。

26日 夕刻、北京城入城の1個大隊が26台のトラックに分乗し広安門に到着したが、門は閉ざされていた。折衝の結果、午後7時過ぎ開門されたが、先頭の車両3台が通過した時、城壁上から乱射された。救援隊を送り、10時過ぎに一応停戦となった。

28日 北京・天津地区総攻撃の際、日本軍機が通州で誤って冀東保安隊を爆撃してしまった。29日午前2時過ぎ保安隊、第29軍兵士が、日本軍守備隊(100名)、居留民(380名)を襲撃、居留民124名、守備隊18名が殺害された。

8月9日 午後6時頃、海軍特別陸戦隊大山勇夫中尉が上海西部地区を車で視察中、中国保安隊に襲撃され、運転手の齋藤与蔵一等水兵と共に射殺。

13日 上海で本格的交戦状態。

14日 中国空軍機が第3艦隊艦艇、陸戦隊を爆撃。

15日 海軍航空隊は、長崎県大村、台湾から南京、南昌、杭州など中国空軍基地を渡洋爆撃。